

予防医学・予防接種と歯科処置

小野星吾

鹿児島大学医学部小児科

小児の重篤な感染症の減少と共に予防医学、健康医学の重要性が注目されている。この中において小児科臨床医と共に歯科医が予防接種の現況、新しい動き、副反応などについて一般的な知識を正確にもっていることは好ましいことである。特に観血的処置に伴う感染の機会が多い歯科医に対してB型肝炎に対するHBワクチン接種がすでに広く実施されていることは周知のことであり、予防医学の点で大きな進歩である。

1989年4月から開始されたMMR（麻疹、ムンプス、風疹）ワクチンはアメリカやヨーロッパの成績と比べ、我国ではその副反応の頻度の高さ、特に無菌性髄膜炎が多いことで注目されている。又、ポリオの制圧に成功した我国でもいまだに麻疹による乳幼児の死亡をなくせないでいる。さらに先天性心疾患や心弁膜疾患においては、口腔内の外科的処置後に細菌性心内膜炎が起こる可能性があり、処置前後の予防的抗生剤の投与が勧告されている。また、心弁膜疾患や冠動脈瘤を伴う川崎病では抗凝固療法が行われている。このような療法と観血的処置の多い歯科治療の事故の予防法のあり方も大切である。

上記のような話題に関して小児科医と歯科医との接点をさぐってみたい。